

明石

バリアフリーの視点から地域の問題点を確認するまちあるきが1日、山陽電鉄林崎松江海岸駅(明石市南貴崎町)周辺であった。現役パラリンピアンの別所キミエさん

＝同市魚住町清水＝をはじめ、視覚や聴覚などの障害者も参加し、福祉関係者や公共交通事業者ら約50人が一緒にまちを歩いた。(勝浦美香)

バリアフリー課題確認

林崎松江海岸駅周辺パラリンピアンと歩く



林崎松江海岸駅の周辺を歩き、バリアフリーの課題を確認する参加者＝明石市貴崎1

2020年の東京五輪・パ
駅になる同駅周辺で、バリア
フリー課題の提案を狙った。
同駅は21年にエレベーターや
多目的トイレの設置が予定さ
れているが、現在は階段しか

歩道にはみ出す木、音声案内なく…「当事者の声聞いて」

参加者は3グループに分かれて活動。別所さんらの班は、総合福祉センターから駅までを歩いた。歩道の幅が狭く、「バスを降りるときにスロープを広げてもらうのに抵抗がある」との声も。民家から歩道にはみ出した樹木があり、視覚障害者、車いすの利用者ともに危険性を指摘した。
今年5月に開設され、障害者スポーツを楽しめる同センター新館も確認。障害者用のトイレは十分な広さがあり好評だったが、「視覚障害者には音声案内がないと場所がわからない」との意見も出た。
意見交換では、各班が気付いた点を発表。「駅にエレベーターがない現状はやっぱり不便」「病院に点字ブロックがなかった」などの声が上がった。
参加した近畿大学名誉教授の三星昭宏さんは「障害者からは『バリアフリーはいっても私たちがいないところで決まる』という声もある。当事者の声を取り入れたまちづくりを進めてほしい」と話した。

ない無人駅だ。